来て！見て！知って！文化財

寺門静軒の足跡
―儒学者の生涯と近代熊谷の曙―

寛政8年（1796）、江戸小石川の水戸藩邸内に生まれた寺門静軒は、若くして儒学と仏典を学び、儒学者として多くの子弟を育てました。一方で『江戸繁昌記』を著して広く知られるようになりましたが、風俗を乱したとして江戸追放の刑を受け、各地を転々としました。

その果てに辿り着いたのが熊谷でした。静軒は奈良村の吉田市右衛門家に身を寄せた後、妻沼の歓喜院に滞在しました。その際、歓喜院院主の英雅上人や地元の人々の要請に応えて、万延元年（1860）に「両宜塾」を開校しました。「宜しく老い、宜しく学ぶべし」という理念のもと、竹井澹如、石川弥一郎をはじめ地域文化の発展に尽くした有能な人材を輩出しました。

慶応3年（1867）、静軒から漢学者の松本萬年に引き継がれた両宜塾では、日本初の公許女医となる荻野吟子が学ぶなど、地域の教育機関としての役割を果たしました。

その後、静軒は鎌倉町の石上寺に住まいを移し、檀徒や宿場町の人々に漢学などを教えました。そして、晩年になると、旧知の間柄であった大里の根岸友山に迎えられ、邸内の「三餘堂」にて塾生を指導しました。慶応4年（1868）3月24日、この地で亡くなり葬られるまで、多くの人々に慕われました。

静軒の後半生は、まさしく熊谷と共にありました。「両宜塾跡」、「三餘堂跡」、「寺門静軒の墓」のほか、「両宜塾記」などの書画も残されており、これらの文化財が静軒の生涯を今に伝えています。多くの民衆に学問と教育の意義を語り続けた静軒の存在は、近代熊谷の曙に輝く明星であると言えます。

◆江南文化財センター　☎048-536-5062